

## 須賀敦子著『ヴェネツィアの宿』から)

須賀敦子さんの著書『ヴェネツィアの宿』の中に<オリエント・エクスプレス>の一章があります。少々長くなりますが一部をご紹介します。

- ☆ 日本に帰るたびに、といっても10年に2, 3度にすぎなかったのだが、私がいっしょうけんめいにみつろったおみやげをわたすと、母も妹も弟もすんなりとよろこんでくれたのに、父だけはつまらなそうな顔をして、みやげなんか持って帰るな、と叱った。値段とも相談しながら、忙しいなかをあちこちまわって、ところをこめて選んだのに。そう思うと、すなおにありがとうと言ってくれない父がうらめしかった。その父が、こんどはおみやげを持って帰れというだけでなく、それを電話でことづけまでさせたりする。しかも父がほしいというのが、まったく意表をついた品物だった。かつて自分がそれに乗って旅をした、ワゴン・リ社の客車の模型と、オリエント・エクスプレスのコーヒー・カップが欲しいのだという。そんなものをどこで売っているのだろう。都心の玩具店に行くと、精巧な模型はすぐ見つかったが、コーヒー・カップを手に入れる方法がわからなかった。「ミラノであちこち駆け回って探すより、じかに列車まで行ったほうが、手っとりばやいかな」友人がそう提案してくれたので、時刻表をしらべ、取るものも取りあえず私は中央駅に出てきたのだった。それにしても、いったい、乗客でもない者に、そんなものを頒けてくれるのだろうか。それを思うと、まもなく構内アナウンスが列車の到着を告げたとき、私は喉がからからになって、息ぐるしいような気がした。私がこうしているあいだにもひとり死に向かっている父に、してあげられることは、これだけしかないのだ。夫が死んだふた月後の夏に、母の危篤で帰国したとき、父はすでに一回目の胃の手術を受けたあとだった。母の病状が一応、落ち着いたあと、父の看護をするために日本にとどまるべきかどうか迷う私に、父はきっぱりいった。おれのために、いまさら、おまえの選んだ生き方をまげるな。ミラノへ帰れ。



☆ パリ発ヴェネツィア経由イスタンブール行きのアシエ・エクスプレスが、ロイヤル・ブルーの車体に金色の線と紋章のついた、あのワゴン・リ社の優雅な寝台車を連ねて、ゆっくりとプラットフォームに入って来たとき、私は、あたりいちめんがしんとしたような気がした。

「ヨーロッパに行ったら、アシエ・エクスプレスに乗れよ」

はじめてフランスに留学することがきまったとき、父は上気した声でそうくりかえした。アシエ・エクスプレス。なんという夢にあふれた名だろう。(中略)



☆ 列車が停止したのを確認すると、私は客車に沿って歩きはじめた。仕立てのいい靴がデッキに立つのが見え、深い緑のローデン・コート of 紳士がまず身軽にひょいと降り立ち、あとにつづく女性に手を差し出すと、彼女はまるでこうして抱きとめられるのをずっとまえから待っていたように、からだの重心を

ちょっと古風に男の手にゆだねる。ある客車の下では、まだ少女っぽさが抜けていない若い女が、これもローデン・コートの若者と抱擁をかわしている。恋人どうしなのか、それともきょうだい別れをつけているだけなのか。ミラノの日常に埋もれている私には、これらのうつくしい人々の着ているもの、ふるまいのすべてに、凝縮されたヨーロッパそのものを見るように思った。

ダイニング・カーのよこを通ると、おそらく父がおなじ色の光の下で食事をし、ひょっとしたら片言の英語で楚々とした美人に話しかけたりしたかも知れない、オレンジ色のスタンドの光が窓越しに見えた。

☆ しばらく行ったところで、ようやく一台の客車の入口に、黒い蝶ネクタイをつけた車掌長が、なにを書きとめているのだろう、小さな手帳を片手にボールペンを走らせているのに出会った。

「すみませんが」

そう声をかけると、車掌長は大げさにびっくりした手ぶりをしてから、顔をあげて、私を見た。

「なんでしょう、マダム」

「少々、おかしなお願いがあるんですけど」

「なんなりと、マダム、おっしゃるとおりにいたしましょう」

ヨーロッパの急行列車でも稀になりつつある、威厳たっぷりだが人の好きがにじみ出ている、恰幅のいいその車掌長に、私は日本にいる父が重病で、近々彼に会うために私が東京に帰ること、そしてその父が若いとき、正確に言えば1936年に、パリからシンプロン峠を越えてイスタンブールまで旅したこと、



そのオリエント・エクスプレスの車内で使っていたコーヒー・カップを持って帰ってほしいと人づてにたのんで来たことなどを手みじかに話した。

ひとつだけ、カップだけでいいから欲しいんだけど、頒けていただけるかしら、とたずねると、彼は、はじめは笑っていた顔をだんだんとかげらせたかとおもうと、低い声の答えが返ってきた。

「わかりました。ちょっと、お待ちいただけますか」

そういって車内に消えると、彼はまもなく大切そうに白いリネンのナプキンにくるんだ包みをもってあらわれた。ありがとう。そう言った私の声はかすれていた。お代は、とたずねる私に、彼は包みを開いて、白地にブルーの模様がはいったデミ・タスのコーヒー茶碗と敷皿を見せてくれながら、まったくなんでもないように、言った。

「こんなで、よろしいのですか。私からもご病気のお父様によろしくとお伝えください」

☆ 羽田から都心の病院に直行して、父の病室に入ると、父は待っていたようにかすかに首をこちらに向け、パパ、帰ってきました、と耳もとで囁きかけた私に、彼はお帰りとも言わないで、まるでずっと私がそこにいていっしょにその話をしているかのように、もう焦点の定まらなくなった目をむけると、ためいきのような声でたずねた。

それで、オリエント・エクスプレス……は？

☆ 死にのぞんで、父はまだあの旅のことを考えている。パリからシンプロン峠を越え、ミラノ、ヴェネツィア、トリエステと、奔放な時間のなかを駆けぬけ、都市のさざめきからさざめきへ、若い彼を運んでくれた青い列車が、父には忘れられない。私は飛行機

の中からずっと手にかかえてきたワゴン・リ社の青い寝台車の模型と白いコーヒー・カップを、病人をおどろかせないように気づかないながら、そっと、ベッドのわきのテーブルに置いた。それを横目で見ると、父の意識は遠のいていった。

☆ 翌日の早朝に父は死んだ。

あなたを待っておいでになって、と父を最後まで看とってくれたひとがいて、戦後すぐにイギリスで出版された、古ぼけた表紙の地図帳を手わたしてくれた。これを最後まで、見ておいででしたのよ。

あいつが帰ってきたら、ヨーロッパの話をするんだとおっしゃって。

(了)

